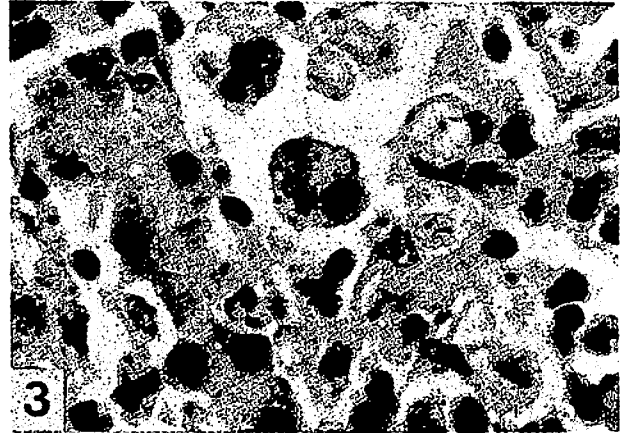
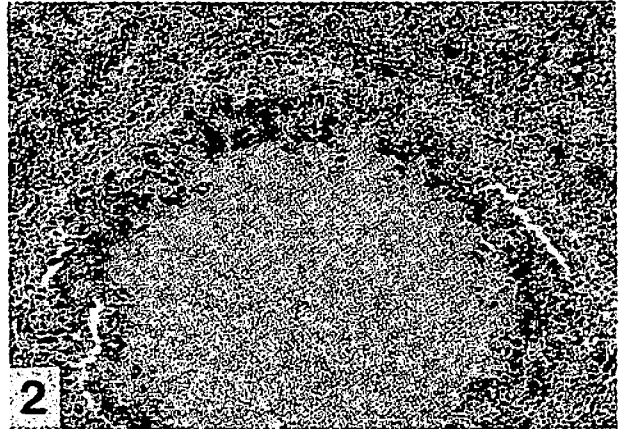
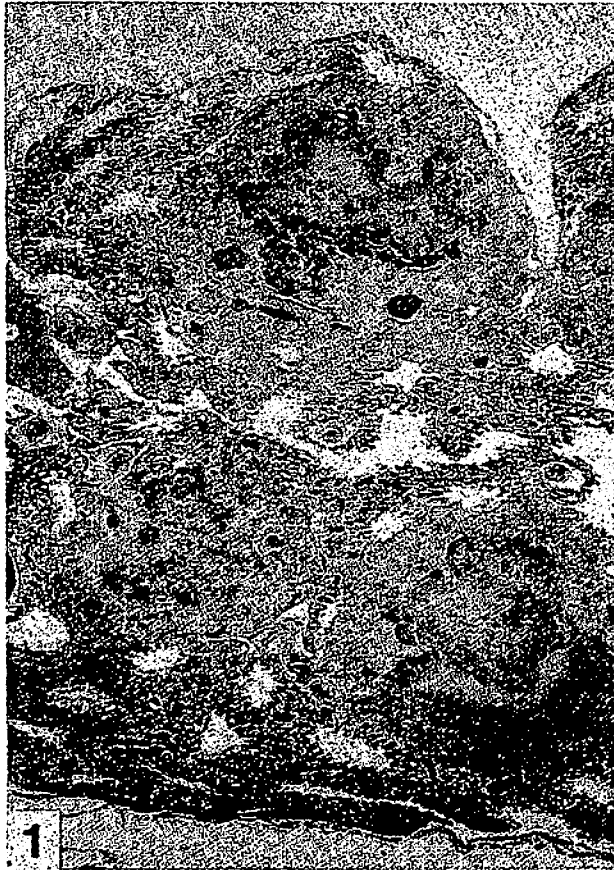


ハトのパラチフス症

宮崎大学農学部家畜病理学教室 第14回獣医病理学研修会標本 No.217



1973年2月から11月にかけて宮崎市内の某動物園で放飼中のクジャクバト(当時約350羽飼育)に、下痢を主徴とする臨床症状を呈して1~2日後に死亡するという一連の疾病(約40羽死亡)が続発し、当教室で27例を剖検した。

病理学的共通所見として、①肺・肝・腸間膜の乾酪様結節 ②肝・腎の腫大・褪色、巣状壊死、偽好酸球を主体とする著明な細胞浸潤、血管壁の炎性膨化 ③肝・脾の特異的組織球(チフス細胞)の多数出現 ④腸粘膜の壊死・潰瘍 ⑤生殖器系の異常(卵管炎・精巣炎) ⑥腸間膜・腸間質の細胞浸潤が認められた。

うち12例について微生物学的検索を行なった結果、諸臓器から *Salmonella typhimurium* が、ほぼ純粋に分離され、本症はハトのパラチフス症であることが判明した。研修会への提出標本は、それらのうちの1例の肺および肝であるが、本疾病の共通病変をよく表現している。

その肉眼的所見は、肺に米粒大白色結節の密発、肝の腫大・褪色が見られた。

また組織学的所見として、肺の表面・剖面を問わずに密発した結節は、中心部が多数のグラム陰性の短桿菌を含む壊死層、その周囲は偽好酸球を主体とし、組織球・

リンパ球・形質細胞の滲出が著明な肉芽層を呈し、壊死層との境界に多核巨細胞が多数出現している(写真1)。肝では実質内に顕微鏡的大きさの肺と同質な乾酪性結節が散在(写真2)、また実質性の微細壊死巣の出現とともに類洞壁には細胞の繁殖性浸潤が著しい。浸潤細胞は偽好酸球を主体とし、それにリンパ球、形質細胞を混じており、浸潤部は全域にわたっているが特にグリソン氏鞘に近い小葉辺縁部が顕著である。浸潤偽好酸球のほとんどは単核の幼若なもので、しばしば有糸核分割像が認められる。細網線維の発達も浸潤細胞の間に著明である。また、これら浸潤細胞群の内に赤血球や白血球を食して肥大した、鉄染色陽性の星細胞由来と思われるチフス細胞が多数認められる(写真3)。

以上の所見は、先人らの鶏パラチフス症の報告とよく類似するものであるが、今回の例の如く細胞反応の顕著な点については報告がなく、クジャクバトが本菌に対して強い特異性を持ち、ヒトのチフス疾患と同様な全身性の疾病となったと思われる。

提出した標本(肺および肝)における組織学的診断は *Salmonella typhimurium* による結節性乾酪性肺炎および壊死性繁殖性肝炎である。